

信浄寺蔵梅翁著『磐田記』の翻刻

——伝記的資料＜隠栖の地の記と狂詩集＞——

東 聖 子*

(1984年9月25日受理)

解 説

美濃国の寂照山信浄寺の二代目住職梅翁は、延宝4年(1676)に『磐田記』を著した。梅翁54才の時である。蕉門で重要視された彼の作法書『俳諧無言抄』が刊行されたのは、その2年前のことであった。

『磐田記』は、現在信浄寺に所蔵されており、同寺所蔵の『源氏物語』の写本や『御傳』（親鸞上人の伝記）等の梅翁の筆蹟と同じことから、梅翁自筆本といえる。

本書は、梅翁後半生の隠栖の地である岩田にちなむ和文・狂詩・漢文を集めたものである。冒頭に梅翁が、8丁半ほど岩田の四方の風景や風雅の地であることを述べた和文と五言律詩を書いている。そのあと、京・越前・豊後・播州・尾陽・紀州・筑後・阿州・濃州等の僧侶達が岩田の風光を賞美した五言律詩・七言律詩を載せている。これらの寺の多くは、禅宗の臨済宗妙心寺派で、支考が修業した濃州山縣大智寺も含まれている。他は、信浄寺と同じ浄土真宗本願寺派である。序は應山住持操柏翁が書き、跋は加納藩の儒者多湖投散子が記している。

太田成和氏は、『加納町史』（下巻・昭和29年4月15日刊）のなかで、「万治3年（1660）各務郡磐田に一字を再興し、移って之に居た。」とされ、38才で既に岩田に移ったとされる。しかし、信浄寺所蔵の『家系図』には萬治三庚子易地再興一字延宝元癸丑各務郡岩田者家隆伊家知家等所題詠之佳境也故草創第宇愛山林景像隠居自製和字記并狂詩歌客騷人吟賞而和之者若干首とあり、万治3年に岩田に一字を再興したとは記していない。延宝元年に岩田に隠栖したと記述されているのみである。太田氏がもとにされた資料が不明で確定できないが、梅翁が岩田に移住した時期は、38才・51才の両説があるが、『家系図』によれば延宝元年・51才頃としてよいかもしれない。

岩田は、伊家・知家・家隆等の和歌に「岩田の小野のしのすすき」と詠まれた歌枕である。梅翁はこの風雅の地をこよなく愛し、晩年をここで過した。元禄2(1689)年11月20日に67才で亡くなった折、岩田の小山南麓の巖頭に埋葬された。四代目の了咏の墓石とともに、梅翁の墓碑は今もそこに建っている。

* 国文学研究室

現在、岩田の小山からは三峰山が眺められ、梅翁の縁で後に建てられた西明山明道寺の前の小川沿いに行くと、広い水田のむこうに長良川が流れ、八幡宮のある山や鏡岩などが望める。

この書は、梅翁の延宝4年頃の動静を知る伝記的資料としてここに紹介するものである。梅翁の交遊関係がわかるとともに、風雅の地を愛する人となり知られ、

都この里において、春秋のたちかへる色・降物・そひき物のけしき、うき世の外のことちするハ、そのさかひのしつかなるによるなるへし。

と本文にあるごとく、岩田の静かな幽境で過ごした、晩年の飄逸な閑居の日々が想像される。他の人々の狂詩は、梅翁に対する挨拶というべきもので、滑稽の狂詩という近世前期の一般的な狂詩の域を脱しているものではない。

また、『磐田記』の翻刻については、太田成和氏が昭和27年7月10日に模写本を作られ、信浄寺に寄託された。さらに最近、岐阜の歴史専攻の高校教員の方が翻刻を試みられたがまだ活字化されていないとのことで、今回紹介させていただくこととした。

書 誌

装幀 列帖装。1冊。

表紙 白紙無地。

寸法 縦23.9㎝、横19.5㎝。

題簽 中央、無辺。「磐田記 全」

（但し、左下に剝落した跡があり、後に中央に移したものである。）

丁数 28丁。（墨付25丁半）

（裏表紙の内側に2行書かれている。）

行数 10行。

翻刻凡例

- 一、漢字および仮名の表記はほとんど底本に従ったが、一部現行の文字を用いた。
- 一、濁点は底本になくそのままとし、片仮名のルビ・返点は底本の通りに付した。
- 一、文章の段落と句読点は底本にはないが、私に施した。

一、本文の字の誤脱は、□として文字を補った。

一、丁移りは『』を以て示し、丁数を数字で記した。

美濃国各務郡磐田といふ里ハ、古人もうたのさま〜
にもてはやしけんところなれハ、新曲このむ人々なむ爰
に到ハ、いかさまにも尺八の竹の一ふしハあらんとそお
もふ。山のすかたへちまかりて、ふもとに古畑あり。川
の流うねくりて、めぐりに荒小田あり。ここの藪のう
かしこの林の陰に、あやしの家とものひとつふたつみ
つよつ、あるハ軒端あらハに、あるは『棟ほのかになと見
えわたるさま、絵にもかゝまほし。

四方につらなるけしき跡先となく筆にまかせ侍に、ま
つ北にうちわたして山あり。木たち物ふりて秋のいろは
にはあらぬに、しの字に似たる杉あり、くの字といはむ
松あり。ふもとに八幡宮立せ給はかり。し[か]るにむか
しハこのところにも弓・箭の道祈りし人のすめれハこそ、
かく祝ひたてまつりけめ。いまはたゝ『地侍といふ二字
を頸にかけたるハかりにて、鋤鉞のさきになむめうかあ
らせ給も、いかなる神慮ならんかし。

その山の西にあたりて土佛といふ處あれと、いつの世
に水遊し給しにや、今ハ跡かたなし。鏡岩といへるこそ
むかへハいまに影うつりて、心をミかくたねともなりぬ
へけれ。

前に北より流るゝ川あり。下戸ならぬ男の器うかへな
むところよりハ、廿里ハかりなかれ来て、『源順か兎毛の
さきにてとめ置つる有知のほとりをめぐり、それより三
里あまりをへて此所に到れり。これより又鵜舟の名所な
る長良川、阿仏かいさよひの紀にのせつる墨俣などいふ
ところをゆき〜て、鰻のぬめる姿に十二三里へめぐり
つゝ、つるに桑名に到て伊勢の海に流入めり。この川の
風景ねたり起たり見れハこそあれ、棚なし小舟に『柴
といふ物をつミ、水馴棹さす袖の岩のはさまに見えつかく
れつするもあり。筏士のうきぬしつミぬなかれにしたか
ふを見て、まて事とはむといふ人あれと、聞ぬ顔してす
くもあり。あるハ翁宿人のなり出たる岩のはなにつる
ゝつゝつりたるゝを見て、礪溪のむかしを思ふ。その水
のまかりてよとむところを瀬瀨といへは、いかなるたハ
れもやあり』ぬらん。上にさかしき山あり。川そひにつ
ゝける道を左轍となつけれハ、いにしへきふの一乱に山
城落けんとき、楯籠りし武人も下坂に成ツゝこのところ
へ分来れるに、時しもあれ右は崖にして鰐の口に到れは
のかれかたく覚え、鬼岩にのそめハ来てつかむかとうと
ましく、左ハふかき瀨にして怪斜に真虫塚に『行かゝれ
ハ、足のふミともおほつかなく、弓杖二つえ三つえをた
のみ、腰なる鞍も巖につかゆれハ、左へつけなをしつゝ
やう〜とをりけるさまを、やかてそこの名にいひける

とかや。そのつゝきに、明道といふ寺の跡あれと、立す
くミといはん石もなく木端のやうに思はるゝ像もなし。
されと、経をよむ鶯・本尊かけたかたとふ郭公を聞ハ、さ
なからむかし恋しく、『彼仏の国に六種の鳥ありて轉も、
法音なりとなむとけるもさる事にやとおもひやらる。

東のふもとに、月読神の御社あり。かゝる処にあかめ
奉るなむかたしけなきわさなれと、もとより塵に同り給
御ちかひなれハ、たとひ夫婦かけ向ひなる山賤の薬屋の
うち、又独宿の婆か木綿機たつる窓下までも、照し給
はんかし。

南のかたはらに、九折なる道の鐙坂と『名しハ、日野
といふ里へかよふなりけり。その南につゝける山を尾坂
が嶽といふ。この山をたとへハ比叡山をハたちハかりに
丸し直して、その一粒にもたらぬほとにや侍へき。

北のひらに、烏帽子岩といふあれときてミる人もな
く、傘に似たる松あれとさしてほむる者もなし。ふもと
に見明とかやいひし寺の跡あれと、いまは物かはり[て]
なきから送る野へとなりぬ。』されハ、男鹿のこゑハつま
の跡とふかと哀に、木公の叫へるハ木葉猿のちりうする
に断腸かと聞なして、無端こゝろやむ時なし。

南にあたりて、三峯といふ山あり。古城の跡なりとて
そのかたかすかに残れり。こゝに登て東を見れハ、はる
かに太山ありて、九月より微雪のかゝりぬれハ、彼東坡
か岐陽の句もおもひ出ぬ。是なん信州駒ヶ嶽といへり。

南の『方を見れハ、夷地ひとつになりて漂渺のうらを望
めり。おもふにそれ伊勢や尾張の海つらなるへけれハ、
彼中將の言の葉もなつかし。なこやの城はそれかとおほ
めかしく、犬山ハさたかにみえけり。西北のかたハちか
き山に礙られぬ。それより良のかた、里よりハ巽にあた
りて牛頸となつけれハ、けに牛のねたる形なれハなる
へし。その尾に『ついてまハれハ、南にいにしへ瀬戸物
焼はしめし竈岬といふ處あり。そこに祖母・懐といふ跡
あれと、今ハあたゝまりもさめたり。されと、火桶・油
壺やうのものゝかけたるか、小石交りに幾等おちゝりぬ
前に、摺鉢うちふせたるやうの小山といふあるも、とこ
ろからおかし。そのあたりより清水流出て、すゑハしよ
ろ〜川となりつゝ里の中へ分入を、逆川といへり。』天
柱おれ地維絶てより水ハ東南へこそなかるゝなるに、是
は西北に落行めれはかくなつくるなるへし。

里の東の傍に、坤より良の方へ旅客の往還ハ、中山道
加納より蟹のハふさまに飛驒国へ分入道なりけり。彼藤
原伊家かあつちの岩田とよミシハ、このところならん
かし。正三位知家か岩田の小野と詠シハ、いつの世にか
すき返して、いまは『しの薄のほのかにもしる人なし。
家隆の言葉のすゑとて、真葛のミこゝかしこはひまハれ
り。是なんむかしの餘波とぞ覚る。かくいひつゝくれ
は、山鳥の尾のしたり尾のなか〜しきもうるさくて、

かきさしつ。

近曾わか身ひとつの住所もとむとて、こなたかなた嘯ありきしに、いかなる宿世にや此処にたとりきて、蝸牛の背におふかりの小家しつらひ、井のうちの蛙のすミつくる事になりぬ。さはいへと、破衣のひとへにかけこもらんとにもあらず。只、折節あめまに扶られ来て半部うちおほひつゝ、老のいきつきなから仏の御名をとなへてたのしむならし。都この里において、春秋のたちかへる色・降物・そひき物のけしき、うき世の外のことちするハ、そのさかひのしつかなるによるなるへし。

かゝる風流をのか禿筆にてはいかてしるし侍らん。なれと、わたつミの一雫を檀幣に打しめして、見ぬ人にひけらかすなるへし。されは、ゐなから名所をしてふ花より外のある人も、また見ぬ月のミやこ人も、こゝらのありさまおほしやりて、詩にまれ哥にまれそのほとゝの言の葉を吹風の便によせ給ハ、ミつから草の戸に

老僧把杖来 柴戸手親開
山聳鼻端卓 水流腰下回
煙昏鍋坂路 月映鏡岩臺
此景何人畫 唯應狂句催

信淨寺

皆延宝丙辰孟春日

釋梅翁稿

古哥 藤原伊家
今しハとほに出ぬらし東路の磐田の小野のしのゝをすゝき

正三位知家

しるやいかに岩田の小野のしのすゝきおもふこゝろハほにいてすとも

家隆

けふミれハ岩田の小野の真葛原うら枯わたる秋風そふく

釋梅翁子家、和光同塵之道、而豪於歌、而雄于詩、也頼与予友、善矣間膺、乎我山之良嶽、行五六里許而有山村之名、磐田、翁綿、叢于彼、放曠從情之所、適矣一日懷、卷來投、于阿兒、矚、旃彼地之記并詩也其記也或挹、定家々隆之清雅、其詩也或激、蘇新黃奇之餘流、烏乎筆端之風直若、令、人坐對其地、也彼所謂、有聲之畫展不誣矣越登臨之思將、飛翁云不嫌、壁外無供給、惠然肯來也乎予諾欲、往亦不果過、雪夕、遇、花晨、此日不宿、約而勾引、十雙輩之衲子、來俛仰之間頗愜、素聞、也夫山形偃蹇有野鹿徜徉、或友或群川流屈曲有、焦魚游泳、或百或千容、遂、猗々弱水三萬里之流邊、簷有清而如、練洞底七十峯之碧入、窓如、華而曉、豈止枕、流漱、石而已乎哉將与、夫仁者知者、

同、其、樂、矣、逮、於、旗、其、景、趣、幽、邃、不、是、弱、毫、之、所、能、及、悉、見、于、記、矣、翁、請、令、參、徒、和、我、狂、詩、以、邀、之、以、遊、之、予、云、夫、詩、文、也、者、非、我、宗、之、所、業、吾、侪、况、乎、不、長、于、俳、言、奚、塞、重、望、也、哉、然、坐、客、皆、云、詩、予、亦、不、獲、辭、聊、挈、襤、材、以、賡、其、韻、礎、者、二、律、只、恐、招、唐、突、之、哈、矣、敢、加、点、竄、

詩云

殘生販去來 三徑為花開
竈洞烟凝暗 逆川流細回
優婆懷不暖 土佛跡無臺
向道磬田客 吟髭莫白催

八幡乘輿不凶來 蘿細路誰何踏開
若菜摘眺林下去 姥瓜盛自畠中回
夕方詠月踞横座 朝每読経向見臺
此地風情言不道 昏鐘莫打且詩催

延宝四歲孟春日

應山住持操柏翁稿

延宝丙辰春王正月吉日師以衆訪、信淨寺主盟之別墅、于時有、詩之往来、師謂、嗟夫雖、苦吟還碍、道偶逢、人之求、豈可、緘、言乎哉、言、各厥志、矣、於是衆咸雷同、爾惣望、袖、子、座、之、手、也、

和 京妙心寺光国院靈鎮
面白也云來 草菴隨意開
水流而石出 磡曲亦峯回
藪下凉床座 寒山月鏡臺
天晴名譽地 狂句每人催

又 越前福居宝泉寺宗接
春風吹袂來 乘輿素懷開
魚干獺洩躍 鳶於鵠嶺回
騷人移好景 練衲坐清臺
相對論詩句 更無販屨催

又 豐之後州旧杵多福寺素梅
生客扣房來 兩山排欄開
鏡岩移影瘦 鍋坂罩烟回
樵夫登層嶺 漁翁坐釣臺
詩章吟來就 奈暮色頻催

又 播州加納常光寺祖恩
杳然尋防來 門共白雲開
尾坂百花麗 鬼岩群木回
有人窮眼界 無物鎖灵臺
不節詩囊重 販程駐屨催

又 濃州山縣大智寺禪嵩
世人希往來 蓬戶更無開
不是香炉遠 復疑檜露回
藤池紫金殿 橫座白雲臺
目送磐田景 滿前詩思催

又 豐後旧杵月桂寺禪育
遊子賦詩來 參差桃李開
風和鶯轉滑 日暖燕吟回
竈洞撓无火 鏡岩明匪臺
我宗諳此事 聊有道情催₁₃₉

又 濃州瑞龍寺靄栖智丈
尋花拾翠來 多謝竹扉開
藪下黃鸝轉 藤池白鷺回
依稀盤谷地 彷彿淩敲臺
日短岩田里 夜遊秉燭催

又 全州椎倉弘誓寺祖超
杖屨履霜來 柴扉帶霧開
鳥飛林影動 猿叫澗声回
藪下好詩景 藤池明鏡臺
空山遙引勝 不覓栗膚催₁₄₄

又 濃州長良崇福寺禪格
枯藁乘興來 無雪却花開
禽出平林轉 獸群尾坂回
灯暝孤店雨 鐘動暮樓臺
滿目愀詩景 吟情日可催

又 尾陽清洲長光寺祖瑞
尋山涉水來 茅戶傍林開
日暖探花步 天晴帶月回
高橋龍臥谷 明道靄栖臺
称意滿菴景 詩文誰不催₁₄₉

又 濃州河内瑞光寺智察
幽栖鎖戶來 山色畫屏開
藪下吟詩立 藤池挈杖回
林鳥啼佛閣 松子落層臺
寂寞無塵地 遨遊教我催

又 尾州中島妙興寺宗琢
訪幽此地來 門向竹邊開
石有生師跡 山无支遁回
玉岩間出月 鍋坂築成臺
底怪詩篇好 吟懷日々催₁₅₄

又 濃州木田通玄寺祖德
屏除塵世來 白屋數椽開
尾坂西南側 逆川東北回
片雲橫万壑 孤靄舞三臺
消日岩田境 吟餘拍月催

又 紀州田邊祥源寺良圓
索居訪友來 興逸鎖眉開
簑笠畠中立 詩歌藪下回
雀遊華表柱 犬吠見明臺
此景未吟尽 胡為飯意催₁₅₉

又 筑後久留米梅林寺智徹
幽栖無俗來 竹戶不曾開
橫座曲肱睡 寒山袖手回
白雲輕出岫 蒼靄且奔臺
風景欲題上 鐘声暮色催

又 濃州池田龍德寺祖俊
呼杖訪僧來 相逢笑臉開
臨溪請陸子 枕石憶顏回
藤池一瓢水 玉岩九品臺
樂邦曾不遠 滿眼滿前催₁₆₄

又 濃州加納光国寺祖珉
近曾約束來_{イマハナ} 弥早鬱胸開
水面月輪淨_{ナヘテミナ} 山腰雲帶回
並皆布苔席_{マスクニ} 驚直下蓮臺
花咲平林下 定遭哥會催

又 豐後府中萬寿寺惠章
登臨終日忘_ル 來舍北舍南美景開
妻鳥山前頤笠立 真虫塚畔褰裳回
梅花帶雨平林曉 竹葉拂堦藪下臺
觸目風光描不尽 也添遠寺晚鐘催₁₆₉

又 尾陽黑田宝光寺惠潭
春風得意訪幽來 烏帽岩邊澗戶開
七八片雲牛頸起 兩三行鳥鵲峰回
如同薦福菩提境 匹似廬山蓮社臺
遊目騁懷千里客 吟身不覓夕陽催

又 濃州加納光国寺禪庸
九陌紅塵翫不來 柴門今少為花開
三峰松古靄飛戾 一本杉高鴉噪回
吟月夕望青嶂頂 看花晨傍白雲臺
地灵春日猶嫌短 飯計長遭入夜催₁₇₄

又 濃州鏡島乙津寺祖碩
孤節遠踏翠轡來 門對春風扉半開
鬼岩日暄幽鳥語 寒山雲晴野猿回
夜思弘起真宗法 蚤作閑登浄土臺
四韻新成教我 不知更鼓一聲催

又 阿州渭水興源寺素静
一簾纔捲數峯來 漠々春雲為我開
蔽下花明鶯出囀 平林松暝鶴飛回
霞埋華表八幡社 波浄藤池月読臺
滿目宜詩菴外境 冥搜長遷寂寥催

又 尾州名古屋惣見寺祖佑
幽栖莫謂少賓來 戴下日暄小徑開
閑對牛頸迎嶂麗 也看鵝飼屋川回
孤松経雪出寒竺 芳艸得時生野臺
国士蓮中曾不夢 桑麻交語白茶催

又 濃州加納光国寺智梵
客醉風光日々來 菴隣民舍竹門開
天晴鴿峯片雲起 江曲獺洑流水回
撲蝶鶯飛尾坂獄 牧牛童立瑤岩臺
鄉愁欲減平林下 也憐鐘聲暮色催

和磐田狂詩韻 多湖玄叱
近者相攸來 御坊一字開
人從加納詣 僧歷二岩回
銀粟溢茶碗 塩梅調飯臺
承知多致景 蛙步俟花催

全 洛陽之住石原玄佐
蓬累此販來 幽栖早晚開
登山率足去 臨水洗心回
月護岩田里 風荒横座臺
草庵亦方丈 賀茂記應催

全五 岐陽願正寺宗俊
狂詩先出來 拍手卷中開
厭塵浮世 如形一庵
横座山僧睡 左轍地侍回
欣
月看巡酒器 花曾飾文臺
俳詩五首
有是風流事 誰家馳足催

全四 上加納圓德寺功吟
看磐田紀來 埜意忽然開
住里 自
竿鹿問妻去 莓猿抱子回
歌謳弥助洞 経誦見明臺
販否友同志 晚鐘山寺催

全二 下有知之住釈存竜
策膝栗毛來 駐轡打戸開
傷宿草庵 風光密却
土窩窰猿出 竈洞拾薪回
詩孝大唐国 哥吟野馬臺
人々于爰到 座興少焉催

全三 石神正光寺教淳
独抱哥袋來 於越密焉開
眺山水 絶景四方
長柄川站上 飛驒道憤回
賤男根為枕 貧女片充臺
不古此消息 願言一会催

全 柳津光澤寺祖玄
客僧敲戸來 童子擠門開
左鞭月弓入 逆川花筏回
苔衣无掛棹 茶碗不乘臺
儉約隨時護 感情每物催

全 自観
偶然得隙來 坐擠竹窓開
霞中瑤岩碎 風吹土穴回
長今新屋敷 虚寂古城臺
濁酒三盃上 狂詩一笑催

全 松雲
師于此邊來 憶應宿世開
邑人聞法音 門弟孝詩回
牛放鬼岩畔 馬維孫尾臺
且千風景地 朝夕話斗催

和岩田狂詩韻 武義興德寺宗微
歌枕尋來 吸筒氣任開
旅人振手透 馬子擲尻回
惶怖鬼岩上 殊勝土佛臺
月花俳諧友 趣向坐相催

同 平良徳寺周蔵司
 隠居處出来 新戸與花開
 水面月飄汎 山腰雲緩回
 白梅廣雪斷 青柳靡風臺
 扱茂珍敷境 和詩遊興催」

(2丁分 白紙)

東路磐田小野者古來名_ニ于世_ニ處也去_ニ際家隆之詠殘_ニ葛
 葉_ト知家之詞沮_ニ篠薄_ニ矣其地為体山有_ニ凸凹之形_ニ水有_ニ口
 ○之_ニ釣逐_ニ鹿_ニ獵_ニ傍_ニ岨_ニ如_ニ虎_ニ々_ニ捕_ニ魚_ニ漁_ニ隨_ニ流_ニ如_ニ鷺
 々_ニ々_ニ雪晨向_ニ上_ニ於_ニ尾_ニ坂_ニ西_ニ行_ニ之_ニ眺_ニ不_ニ二_ニ典_ニ刑_ニ彰_ニ眼前_ニ月
 夕直_ニ下_ニ於_ニ瀨_ニ測_ニ式_ニ部_ニ之_ニ望_ニ湖水_ニ景_ニ趣_ニ在_ニ足_ニ下_ニ遊_ニ子_ニ届_ニ此
 口_ニ流_ニ涎_ニ足_ニ切_ニ聲_ニ哀_ニ艷_ニ地_ニ也_ニ吾_ニ師_ニ梅_ニ翁_ニ偶_ニ然_ニ來_ニ此
 邑_ニ間_ニ密_ニ竹_ニ料_ニ理_ニ赤_ニ土_ニ小_ニ屋_ニ元_ニ來_ニ不_ニ本_ニ居_ニ人_ニ及_ニ罕_ニ而_ニ柴
 編_ニ戸_ニ常_ニ掩_ニ然_ニ余_ニ乘_ニ渡_ニ世_ニ船_ニ東_ニ漂_ニ西_ニ泊_ニ多_ニ年_ニ矣
 或_ニ日_ニ到_ニ着_ニ于_ニ此_ニ地_ニ只_ニ暫_ニ下_ニ猫_ニ終_ニ竟_ニ凌_ニ雨_ニ之_ニ縁_ニ得_ニ
 防_ニ風_ニ之_ニ便_ニ師_ニ一_ニ日_ニ戲_ニ製_ニ其_ニ地_ニ記_ニ并_ニ詩_ニ也_ニ詞_ニ花_ニ麗_ニ郁_ニ而_ニ意_ニ葉_ニ
 美麗_ニ也_ニ粵_ニ和_ニ其_ニ韻_ニ之_ニ人_ニ有_ニ數_ニ余_ニ亦_ニ雖_ニ執_ニ向_ニ聯_ニ砌_ニ与_ニ兔_ニ毛_ニ
 生_ニ得_ニ單_ニ疎_ニ于_ニ詩_ニ賤_ニ陋_ニ於_ニ文_ニ好_ニ從_ニ他_ニ嘲_ニ嘲_ニ者_ニ左_ニ之_ニ右_ニ之_ニ缺_ニ唇_ニ
 虛_ニ嘯_ニ意_ニ慰_ニ者_ニ綴_ニ可_ニ咲_ニ雅_ニ言_ニ以_ニ汚_ニ可_ニ惜_ニ尊_ニ韻_ニ云_ニ余
 取_ニ次_ニ踏_ニ之_ニ來_ニ老_ニ師_ニ別_ニ墅_ニ開_ニ源_ニ橋_ニ音_ニ聽_ニ掛_ニ蔵_ニ灘_ニ号_ニ流_ニ回
 月_ニ焔_ニ瑤_ニ岩_ニ上_ニ風_ニ涼_ニ扇_ニ尾_ニ臺_ニ住_ニ斯_ニ常_ニ富_ニ景_ニ輕_ニ口_ニ誘_ニ先_ニ催

磐田寓子玄隆拜」

釋梅翁大徳ハその家大谷の法流を受なから、ひそかに
 曹溪の心水をくミ、剩、難波津・富小川の瀾にもうちし
 めり。その餘波とて、淀川のなかれのすゑにうきにうき、
 山崎のあふらかすまでもかうハしくあまなみこゝろむ。
 まことに、名にしおひて花も実もある人なるへし。

美濃国岩国の小野とかやハ、古人もこゝろとめ詞にあ
 らハしゝところなれと、いまはその薄きれのあとたにと
 めしる人もなきを、この翁の老の行すゑうちかゝみな
 む腰膝の容とこもともむとて、そこにたつね到りぬ。元
 來名に聞えしところなれば、やかて心とまり、酒に酔給
 色をも香をもしる人ひとりふたりのちからをやとひ、草
 かる引むすひて折節の足ためところとす。されハ、花の
 あした月の夕、事にふれ心にまかせ、行てハかへりかへ
 りてハゆき、限なき風景をななめてめを悦ハしめ心を
 たのしむ。しかハあれと、そのおもしろき心のくまをか
 たらんとするに、あとうつハかりの人しなけれハ、さし
 むかひたる影法師をなれたにとおもふへかめれと、傾け
 ハうなつき頭はかふりふりたるのミにて、物いひときに
 あらず。古人はあなをほりてたにいひ入しとかや。

いはてたゝにはえやむましけりとて、つるに管城子

楮先生をまね図けるに、石廬中墨客へも伴ひ來ぬれハ、
 こゝろ行はかりかきあらハし、且又されたるからうたひ
 とつ取あはせて、彼境地の致景に富ることを、へたてぬ
 中の戯にひけらかさる。見る人興に入、つけてうたふ人
 十といひつゝ三にあまれる。予もそのあたまかすなる
 に、順のくふしにはつれむも本意なけれハ、彼芳韵をつ
 き狂詩一律をつゝり出し、座右にしめしつれゝのわ
 らひ草にそなへ待るとそ。

幽齋案内来 主出句眉開
 進物懷詩往 饗應飽徳回
 柿梨斯菓鉢 松竹自肴臺
 尻重磐田客 暮鴉切々催

延宝丙辰端月中浣

倉光敏清書」

ミのなる梅翁ハ元來花のさくありて、ミつからこゝろ
 をたのしミ、人の耳をもよろこハしめ給へり。このころ
 俳諧のこと葉にて磐田の紀をつくり、あけ句のはてに狂
 詩をつけて人々にしめさる。をのかかミにもてなすひと
 のなせるわざに口つくむへきにもあらされハ、その高傑
 をまつとて唐松のもえしさをすりて、すちりもちりた
 る言葉をたくミ、大和竹の筆の軸をとりてふしくれた
 るこゝろねをあらハし、ふつくえのもとにたてまつりけ
 るとそ。

好遊販去来 紋簾欲舒開
 各務山連続 岩田梵轉回
 両邊傳酒器 終夜捧灯臺
 從上詩歌客 吟行於興催

武藝上有知

延宝丙辰孟春日

教泉寺住玄知稿」

書岩田記後

古人嘗有_ニ三願_ニ日_ニ欲_ニ看_ニ天下_ニ之_ニ好_ニ山水_ニ欲_ニ読_ニ天下_ニ之_ニ好_ニ書_ニ欲_ニ識_ニ天下_ニ之_ニ好_ニ人_ニ壯_ニ哉_ニ言_ニ乎_ニ我_ニ読_ニ岩_ニ田_ニ紀_ニ畧_ニ有_ニ
 満_ニ意_ニ焉_ニ斯_ニ地_ニ也_ニ蓋_ニ昔_ニ時_ニ濃_ニ陽_ニ之_ニ驛_ニ路_ニ而_ニ遊_ニ人_ニ過_ニ客_ニ所_ニ題_ニ詠_ニ之_ニ
 佳_ニ境_ニ也_ニ世_ニ遠_ニ夏_ニ湮_ニ人_ニ無_ニ知_ニ之_ニ釋_ニ梅_ニ翁_ニ師_ニ素_ニ抱_ニ泉_ニ石_ニ膏_ニ盲_ニ
 賤_ニ苓_ニ通_ニ米_ニ願_ニ屢_ニ飛_ニ錫_ニ于_ニ此_ニ為_ニ棲_ニ遲_ニ之_ニ幽_ニ趣_ニ遂_ニ誅_ニ茅_ニ一_ニ
 字_ニ自_ニ作_ニ倭_ニ字_ニ記_ニ并_ニ狂_ニ詩_ニ以_ニ述_ニ風_ニ景_ニ寓_ニ襟_ニ懷_ニ焉_ニ俳_ニ言_ニ奇_ニ句_ニ婉_ニ
 曲_ニ殆_ニ尽_ニ桃_ニ源_ニ之_ニ花_ニ天_ニ津_ニ之_ニ鵲_ニ庚_ニ樓_ニ之_ニ月_ニ刻_ニ溪_ニ之_ニ雪_ニ吟_ニ來_ニ嘯_ニ去_ニ
 蔵_ニ絶_ニ境_ニ於_ニ偏_ニ地_ニ運_ニ四_ニ時_ニ於_ニ一_ニ毫_ニ且_ニ夫_ニ尚_ニ方_ニ之_ニ晨_ニ鐘_ニ發_ニ老_ニ杜_ニ
 之_ニ深_ニ省_ニ幽_ニ齋_ニ之_ニ夜_ニ雨_ニ染_ニ放_ニ翁_ニ之_ニ同_ニ參_ニ于_ニ水_ニ于_ニ山_ニ或_ニ濯_ニ或_ニ採_ニ
 何_ニ其_ニ与_ニ世_ニ相_ニ遺_ニ乎_ニ哉_ニ光_ニ國_ニ主_ニ盟_ニ伯_ニ翁_ニ老_ニ師_ニ愛_ニ之_ニ嘉_ニ之_ニ作_ニ序_ニ
 嘆_ニ之_ニ且_ニ令_ニ其_ニ徒_ニ廿_ニ餘_ニ輩_ニ和_ニ狂_ニ詩_ニ至_ニ廿_ニ餘_ニ篇_ニ可_ニ謂_ニ能_ニ助_ニ志_ニ
 述_ニ衰_ニ者_ニ也_ニ余_ニ於_ニ梅_ニ師_ニ頗_ニ辱_ニ方_ニ外_ニ知_ニ己_ニ幸_ニ今_ニ繕_ニ寫_ニ以_ニ賜_ニ之_ニ
 請_ニ贊_ニ一_ニ言_ニ于_ニ其_ニ後_ニ嗚_ニ呼_ニ微_ニ此_ニ翁_ニ則_ニ誰_ニ能_ニ知_ニ此_ニ地_ニ作_ニ此_ニ紀_ニ

焉然_レ則我於_レ此_レ紀謂_レ有_レ略満三願之意_レ不_レ亦_レ可乎山谷
老人云小大₂₈₇』材則異氣味固相_レ似我以應_レ其_レ請云_二遂跋_一

延宝丙辰孟夏日

多湖投散子書

〔付記〕 尚、今回の翻刻にあたり、『磐田記』所蔵の信

浄寺第10代（美濃に移った、梅翁の父）御住職野田了爾氏に快
く許可をいただいたことに、心より深謝申し上げる。ま
た、岩田の明道寺第8代御住職丹羽演暢氏に、岩田の周
囲の地名を懇切に御教示いただいた。さらに、翻字につ
いては、波多野幸彦先生と明治大学徳田武先生に多く御
教示いただき、あわせて厚く御礼申し上げます。